

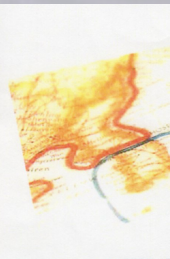


アジアにおける 映像と戦争の記憶

～朝鮮戦争を中心に～

2021年 3月 13日 (土) 10:00 ～ 17:50
国際シンポジウム オンライン開催 ZOOM使用

主催：日本マス・コミュニケーション学会メディア史部会研究会
早稲田大学現代政治経済研究所20世紀メディア研究所
共催：新学術領域「和解学の創成」文化・記憶班
新潟大学地域映像アーカイブ研究センター



国際シンポジウム アジアにおける映像と戦争の記憶～朝鮮戦争を中心に～ 2021年3月13日(土) プログラム

10:00 開会挨拶 司会 土屋礼子（早稲田大学）

セッション1
10:10～12:30

原田健一（新潟大学）

「映像コミュニティと総力戦体制ーバ・モー亡命地の諸相」

趙新利（中国伝媒大学）

「日中戦争と朝鮮戦争の記憶と映像」

中国共産党のプロパガンダ戦略に関する考察」

コメンテーター

毛利嘉孝（東京芸術大学） 倉橋耕平（立命館大学）

12:30～13:30 昼食休憩

セッション2
13:30～15:50

水島久光（東海大学）

「『記憶』から『記録』の時代へ

ー戦後75年と映像アーカイブの課題」

崔銀姫（佛教大学）

「朝鮮戦争と『記憶』」

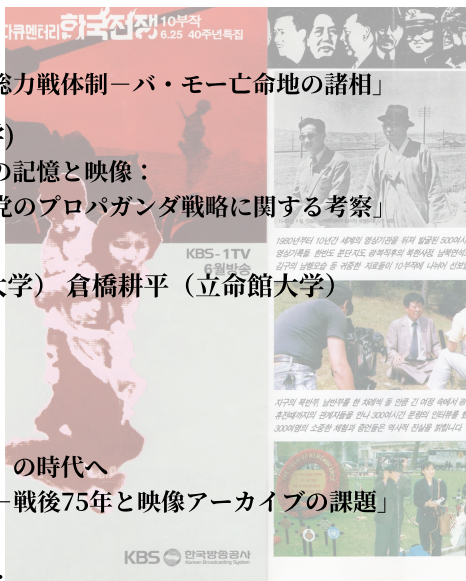
和解学の理論構築と実践についての小考察」

コメンテーター

倉橋耕平（立命館大学） 毛利嘉孝（東京芸術大学）

16:00～17:40 全体討論 司会 土屋礼子（早稲田大学）

17:40～17:50 閉会挨拶



参加お申し込み、お問い合わせは、m20th@list.waseda.jpまで、メールにてお願い致します。

原田 健一
(新潟大学)

「映像コミュニティと総力戦体制 ーバ・モー亡命地の諸相」

1 メディア状況とメディア研究の間

よく言われていることであるが、資本主義と社会主義の対決としての米ソの対立という政治体制は、1989年にベルリンの壁が壊され、1991年にソビエト連邦が崩壊したことによって終結する。その後、資本主義はよりグローバル化し、これまでとは違った形で、人やモノ、金（資本）の流れが活発化する。2001年9月11日のアメリカでおきた同時多発テロは、世界が安定した構造をもったものから、見えにくい流動化した不安定なものに変容したことを表す。同時期、私たちのコミュニケーション・ツールのメディア化は進み、1990年以降のパソコン、インターネットの普及、さらには、2000年以降における映像のデジタル化と重なり、スマホ、SNSなどのパーソナルなコミュニティ・メディアが普及し、そのなかで映像の汎用性が広がり、私たちのコミュニケーションのあり方が文字だけでなくさまざまな画像を駆使するものへと変わり、日常生活の領域もさまざまな態様をもって変容することになる。

これまでのメディア研究は、マス・メディア（マス・コミュニケーション）を中心として展開されてきたが、実際には、メディアそのものはパーソナルなコミュニケーションからナショナルな領域、さらにはグローバル（トランスナショナル）な関係性をも等しく媒介しながら普及、展開していたことが、あらためて明らかになった。

報告者が2008年から、新潟で地域映像アーカイブのプロジェクトを立ち上げたのは、こうしたメディア状況があり、メディア研究そのものを組み替えるための映像資料そのものから蒐集する必要があると考えたからだ。どちらにしても、近代以降、社会変容の要因の一端をメディアそのものが担っている現実があり、メディア研究は変容するメディア状況のなかで展開するしかないものとしてある。多分、研究者に求められているのは、それをどう自覚的に研究領域に繰り込むか、ということにある。

本報告は、こうしたことへの問題提起的な議論を含むものとして、提出されている。

2 社会における移動とメディア

本報告では、まず、ジョン・アリーのモビリティの議論、移動論的パラダイムを参照しながら、メディアの普及過程を社会における移動の側面からみる（Urry 2015）。

ここでは、メディアを人と人との間を情報を伝達することを通して関係をつくりだし、さらに、新たな人と人との関係を媒介していくものとして捉える。近代以前において、「人と物と情報」が一体となって移動していた構造から、近代に並走するように創発されたさまざまなメディアによって、「人と物と情報」との関係が再編されるだけでなく、新たなメディア特有の関係性が加上し、再構造化される。なお、ここで問題にする、映像メディアが新たに加上した関係性とは、R・バルトが指摘する「撮ること、写されること、その映像を見ること」の関係性である（Barthes 1985）。

次に、移動論的にメディアの歴史を具体的にみてみる。もともと、映像メディアは近代になってヨーロッパで生み出されたものであり、ヨーロッパ以外の人びとにとっては、外から移入されるものとなる。日本において映像の普及とは、貿易港であった長崎や横浜といった場所から、それらの貿易の窓口となった為政者、支配層、さらには江戸（東京）や大阪、京都といった大きな都市の富裕層（のちにはブルジョアジーとなる人びと）が中心となっていた。そこで、ジンメル の流行論を敷衍すれば、こうした上流階級（富裕層）から映像の受け入れが始まり、しだいに下層階級（一般庶民）へと広がっていくことになる（Simmel 1976）。

しかし、映像メディアの普及過程を階層の上下関係からではなく、地理的な空間のなかでみると違ったものになる。映像は港・横浜や大都市・江戸の支配層や富裕層から各村々の支配層や富裕層へと、上流階級の間で横へ横へと広がっていった。筆者の調査した新潟の事例で興味深いのは、その村々が中心都市（江戸）と地域の都市（新潟湊）とを結ぶ流通経路である、三国街道を通り魚野川の河川路へと乗り換える中山間地域が重要な役割をはたしていたことにある。

幕末期、この中山間地域にある南魚沼市六日町の地主名望家であった今成無事平が江戸に遊学し、写真の技術を学んで写真機や現像機を購入し、多くの写真を撮った（1886~1896 年 IF-P-001-001~036）。今成無事平が江戸に遊学した背景には、縮みなどの織物の産業が盛んであること、また生糸などが横浜を通して輸出されていたことがあった。幕末期、これらの中山間地域がグローバルな流通経路とつながり、トランスナショナルな関係をもったのは、近世から近代にかけて商品やそれを運ぶ人びとの流れが、網目のように地域と地域とを結んでいたことがあるだけでなく、積極的に都市向けの商品作物をつくっていたことがある。

地芝居（歌舞伎）の一場面
(IF-P-023)

撮影：今成無事平
年：1886~1896 年
場所：今成



映像メディアは、こうした社会・経済・文化的な文脈のなかで、地域のなかで役に立ちうる西洋の技術として受け入れられた。つまり、この中山間地域は、都市と都市との間の流通路としてあるだけでなく、移動を通して文化そのものを生み出すような社会的基盤を備えていた。生糸や織物を生産するだけでなく、時に情報を加工し、この場合、自ら芝居を演じている姿を写真（映像）に撮影し、それを見て楽しむことで、新たな文物を生み出すような文化的な機能を社会が保持していた。より積極的に言えば、移動そのものがこうした文化を生み出していた。その意味で、メディアは必ずしも都市的なものではなかった。

3 メディアにおけるローカリティ（ヴァナキュラーなもの）とハビトゥスを架橋させる

メディアの側から世界を見れば、あらゆる物事は均一化され、平準化されたものに見えてくる。しかし、日常生活の世界から物をみれば、地域によってさまざまな凸凹があることは明らかである。メディアを相手にすれば、たかだか100年だが、地域の住民からすれば、古代から続く世界となる。本報告で扱う、南魚沼地域は、江戸時代以来の居住者は新参者とし扱われる、多くの旧家では平安時代から室町時代から居住する家が多く存在する。重要なのは、こうした歴史性を有する人びとが、近代に逢着し、新しいメディアを取り入れようとするにある。

ジェフリー・バッチェンは、ヴァナキュラー写真論において、近代のメディアである写真が前近代的なヴァナキュラーな民衆的な想像力を媒介することで、社会へと普及していったことを問題化し、これまで対象化されてこなかった日常生活世界にあふれる、ヴァナキュラーな共同性や地域の固有性、あるいは文化と映像メディアとが接合し、生み出されてきた膨大な映像群を再認識し、対象化する必要があるとした（Barchen 2017）。

こうした日常生活における映像について、ピエール・ブルデューは『写真論』において、気軽に撮られていると考えられるスナップ写真ですら、所属する集団に共通する認識、思考、物事への評価などの体系を保持し表しており、そこに思考や知覚、行為の無意識の図式の体系としての身体化されたハビトゥスがあるとする（Bourdieu 1990）。

ここで、フロイトの無意識は表層に現れるとする精神分析の言を援用すれば、日常生活世界にあるパーソナルなコミュニティ（集団）の領域にある映像は、言葉（文字）によって意識化された世界とは異なる、思考や知覚、行為の無意識であるハビトゥスが、身体に表象化された姿を記録するものとして現れる。映像（画像）資料には、こうした地域の集合的無意識が現れており、そこにはある一定の自律性があり、文字資料とは異なる集合的記憶の層が顕在化する。記録された映像は、歴史化された記憶の断片としてあり、それをどう分析し、組織化するかは、現在の人びとの手にゆだねられている。

4 バー・モウ亡命と今成家

ここで具体的な事例へとはいろう。既に紹介したような、移動を基盤とした人と物と情報の中継地としての中山間地域であった南魚沼市六日町に着目し、そこに残された映像資料をもとに、戦時期の戦地ではない、総力戦体制下にある地域社会のありようをみてみる。

ところで、アジア太平洋戦争下の1943年8月、ビルマ（現・ミャンマー）が米英に宣戦布告し独立宣言をおこなった。バー・モウはその時の首相であったが、日本の敗戦にともない、身を守るために日本に亡命する。一方、当時、六日町の今成家の当主となった今成拓三は1940年には土樽村の開拓事業を行い全国的に注目されただけでなく、翼賛青年団六日町団長として活躍し、1945年8月15日には血書「御聖断信受の是非慚死を越えて問ふ」を大本営ならびに警視庁に提出するなどしていた。そうしたこともあり、大東亜省（外務省）は、バー・モウの受け入れ先として、今成家を候補にしていたとされる。また、当時、陸軍中野学校第一期生の日下部一郎は参謀本部第7課に所属していたが、日下部は今成家と懇意にしていたこともあり中野学校グループは、バー・モウを今成家に送ることを画策していたともされる。詳細は不明であるが、バー・モウは六日町の今成家に送り込むことが決定される（この一連の経緯については、『昭和史の天皇』第8巻を参照）。バー・モウを匿うことを引き受けた今成拓三は、その後、1946年1月、バー・モウが連合国軍総司令部に出頭したあと、巣鴨プリズンに、一時、収監されることになる。そうしたことを含め、戦後、右翼から拓三は国士として評価されることになる。

歴史学者である芳井研一は、こうした今成拓三の行動を弟雄志郎との手紙のやりとりから、違った分析をしている。そこでは、今成拓三は六日町の町政を刷新しようとする青年たちのグループの一人であり、そうした政治的な磁場のなかでさまざまな行動をしていたとする（芳井2012）。六日町では、1920年代後半に元町長山口千代松を囲む勉強会である自治研究会や、社会運動関係の書籍を体系的に読む三読会がつけられ、小作組合がつけられたり、六日町議会に議員を送りこむなどの活動が活発に行われてきた。このグループには、今成拓三、雄志郎だけでなく、戦後、共産党の六日町細胞を立ち上げた平賀洗一、鍊二、後に六日町農業協同組合長となった内山徳松、戦後、六日町町長となった岩野良平などが集まっていた。こうした流れのなかで、1940年代に入ると維新会と六日町翼賛壮年団が結成され、1943年にはこのグループの根回しによって元長岡市助役であった今成幸一が迎えられ六日町町長となり、町政改革が推し進められることになる。

芳井の分析は、マクロな一ナショナルな観点から、戦時におけるイデオロギー的な行動である大政翼賛的な行為として、今成拓三の行動を捉えるのではなく、ミクロなローカルな地域の局面から町政改革という

局面から、左翼的な社会運動的な改革運動としての側面を含んだ複雑な運動として捉えようとするものである。それは、日本の近現代史家として中立的な立場で、地域史の観点から国家的な歴史叙述を修正しようとする試みとなっている。

5 映像資料から六日町をみる

しかし、ここで残された映像資料から今成拓三を含むグループの行動をみると、また違った風にみえる。

最初に、平賀洗一によって今成拓三含むこのグループの人びとを撮った動画「六日町 大雪の記録」（1936 年 HS-M-005）を見ると、1936 年の大雪の後の六日町仲通りの様子、駅のラッセル車の活躍、雪上運動会の様子が撮られ、構成されている。最後の雪上運動会では、平賀鍊二、岩野良平、今成拓三など六日町の革新運動を担った人物が次々と写されている。一見、なんでもない運動会にみえるが、この運動会そのものがこのグループによって準備され、町の文化運動として企画されていたものであったことがみえる。子どもたちのための雪上運動会という親を巻き込んだ遊びによって、自由と自治を目指した彼らの意思が、町の政治的文脈のなかで意味をもって機能していたことがみえる。しかし、この映像と並行して撮られた平賀洗一の『ながれ』（1936 年 HS-M-001）は五十沢の山奥の溪流をヨーロッパにある水辺に見立て、沐浴をする裸の女性を撮っており、非合法なもので、グループ内で楽しまれた映像である（原田 2013）。2009 年に公開されるまで、一度も公の場では上映されたことはないだけでなく、芳井の中立的で適切な歴史叙述の範囲を逸脱するものとしてある。

『ながれ』（HS-M-001）
平賀洗一作品 年：1936 年
9.5mm 映画



こうした問題は、今成家に残された戦時中の写真帖にもある。1940 年 9 月 1 日より始められた南魚沼郡土樽村無何有原（現・湯沢町土樽）の開墾作業の約 80 枚の記録写真（IF-P-002-167~248）は、彼らグループがこの地にどういう理想を求めていたのかを考えさせるものであるが、同時に、1942 年 9 月 25 日に行われた今成拓三が主催した地芝居、約 15 枚の記録写真（IF-P-002-259~273）は、確かに芝居に戦時色はあるものの、六日町があたかも別世界のような感を抱かせる。

六日町の地芝居 (IF-P-002-273)
年：1942年 9 月 25 日
マイク右 今成拓三



マクルーハンにしたがって述べれば、あきらかにこれらの映像群には、メディアによって拡張された感覚や感情が写し出されている。しかし、これら映像によって記録された感覚や感情を含み込んだ身体化されたハビトゥスは、理解不能な歴史的な集合記憶としてあり、彼らの意識が目の前の戦争ではなく、遙かな過去の記憶と今後続くであろう未来の時間に対する意識として生成していることも表している。ここでは、コミュニティを支える時間そのものが違った位相にある。

6 重ねられた層としての記憶と映像の記録

六日町の今成拓三を含むグループが瓦解するのは、戦後である。今成拓三は右翼の国土として現れ、平賀洗一は日本共産党の細胞の立ち上げに関わり、さらに共産党と社会党派との分裂のなかで、町政改革派は解体し、米ソの冷戦構造が、小さな町のなかに再現されることになる。彼らが同じグループにあり親しかったことすら、記憶から消される。再び、マクロな歴史が世界を覆うのである。

メディア研究において、現在、中山間地域の交通不便な場所である六日町が扱われることはない。しかしかつてそこは、地域と地域をつなげる移動の中心ステーションとして稼動し、パーソナルなコミュニティとナショナルな世界をつなげていただけでなく、グローバルなトランスナショナルな世界でもあった。バー・モウはそうした政治、経済的、文化的な風土に引き寄せられるように、吹き寄せられ、滞留することになった。

残された映像の記録は、こうした歴史的記憶を指し示している。ここで再び、最初の言に戻れば、メディア研究者は、目の前のメディア状況に大きく規定されている。そのことをどう捉えたらよいのか、目の前の現実に対して何を考える必要があるのか、そのことそのものが問題化されていることを忘却することはできない。

【引用文献】

アーリ, ジョン 2015『モビリティーズ』吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社。

ジンメル, G 1976「流行」『ジンメル著作集 7 文化の哲学』円子修平・大久保健治訳、白水社、pp.31-61。

バッチェン, ジェフリー 2017「スナップ写真－美術史と民族誌的転回」甲斐義明訳『写真の理論』月曜社、pp.145-183。

原田健一・石井仁志編 2013『懐かしさは未来とともにやってくる』学文社

バルト, ロラン 1985『明るい部屋：写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房。

ブルデュー, ピエール 1990『写真論 その社会的効用』山縣熙・山縣直子訳、法政大学出版局。

芳井研一 2012「十五年戦争と六日町青年－今成兄弟とその周辺－」『みなみうおぬま』9号、pp.84-104。

映像については、「にいがた地域映像アーカイブ データベース」を参照。事前に見ることをお勧め致します。

<https://arc.human.niigata-u.ac.jp/malui/index.html#!page2>

ID:niigata PW:eizou

趙 新利
(中国伝媒大学)

「日中戦争と朝鮮戦争の記憶と映像：
中国共産党のプロパガンダ戦略に関する考察」

中国共産党は文学、映画、ドラマ、音楽などの文芸活動を通じてプロパガンダ工作を展開することを重視してきた。毛沢東は『延安の文芸座談会における講話』（1942年）において、敵を勝つには、「銃で戦う部隊」と「文化の部隊」との二つの部隊が必要だと強調し、文化の部隊は「人民を団結し、人民を教育し、敵を打撃し、敵を消滅する有力な武器」だとの認識を示している。習近平国家主席は2014年に「文芸工作座談会」において、文芸工作を通じて愛国主義を高揚させることを強調し、人民を正しい歴史観、民族観、国家観、文化観に導くよう明示している。

ドキュメンタリー、映画、ドラマなどの映像作品は、毛沢東と習近平が曰く「文芸」の一部であり、中国共産党のプロパガンダ工作に運用されてきた。映像作品は中国共産党のプロパガンダ工作においてどのような役割を果たしてきたのか。抗日ドラマと朝鮮戦争の映像を中心に比較しながら考察する。

一、プロパガンダ工作の重要リソースとしての映像作品

抗日戦争と朝鮮戦争に関する映像作品が多く存在している。特に、抗日戦争勝利70周年記念、朝鮮戦争70周年記念の際、中央宣伝部など中国共産党指導部が立体的なプロパガンダ企画を通じて、新聞報道だけではなく、文学、音楽、映像作品などあらゆる手段を通じて、各分野の力を動員してプロパガンダ工作を展開している。映像作品は、愛国教育の重要リソースとして利用されている。例えば、2020年は朝鮮戦争70周年記念として、中央宣伝部と中央広播電視総台が「鴨緑江を跨ぐ」とのドラマを制作上映した。「民族的大義と中国精神を現した」と新華社に評価された。現今の中米競争の国際背景からみると、朝鮮戦争関係の作品はさらに「米国対抗」の意味合いも入っている。この部分では、中国共産党のプロパガンダ工作の視角から映像作品の役割をまとめる。

二、抗日ドラマの娯楽化と中国人の日本観

抗日ドラマは中国共産党のプロパガンダ工作の手段の一つであり、一時期反日的内容の入っているドラマが目撃された。その中には、敵軍を極端に「矮小化」し、自らの力を極端に誇張する手法が多い。たとえば、「素

手で敵軍兵士の体を引き裂く」など衝撃的かつ非常識的なシーンは多くある。これらの作品は、中国国内のナショナリズムと相互作用し、日中関係にもマイナスな影響を与えた。2010-2015年の間に多く表れたこのようなドラマは、どのような原因で出現できたのか、中国人の日本観にどのような影響を与えたのか。中国の検閲制度、国民感情と公共記憶、抗日ドラマの市場状況などの要素と関連付けて、この部分で考察する。

三、抗日ドラマと朝鮮戦争ドラマの比較

中国の抗日ドラマと朝鮮戦争ドラマを比較してみると、複数の共通点と相違点があると考えられる。共通点について、プロパガンダ工作の手段や集団記憶の媒体などが挙げられる。相違点について、抗日ドラマの量は基本的に安定しているのに対し、朝鮮戦争ドラマは「朝鮮戦争60周年記念」や「朝鮮戦争70周年記念」の際に多く上映される。それ以外に、朝鮮戦争ドラマは、抗日ドラマのように娯楽化されることはなかった。中華人民共和国成立の中国共産党の合法性、国際関係などの要素を視野に入れてその原因について分析してみる。

『地下道戦（地道戦）』の
スチール写真（1965）



革命的模範劇「紅燈記」の
スチール写真（1970）



朝鮮戦争70周年記念ドラマ
「鴨緑江を跨ぐ」（2020）

水島 久光
(東海大学)

「『記憶』から『記録』の時代へ」
—戦後75年と映像アーカイブの課題—

1. 『戦争をいかに語り継ぐか—「映像」と「証言」から考える戦後史』
(NHK出版、2020) の主題

直接戦争体験者たちの「証言」が聞けなくなる時代が既に到来している。しかしそれをただ嘆いてばかりいても仕方がない。「記憶の時代」から「記録の時代」への移行期にあるいまこそ、我々がすべきことは何かを問わねばならない。

戦後75年。我々は「戦争の実相」をしっかり捉え、継承できてきたのか。答えは否である。「既に知る者から、未だ知らない者」への語りの非対称性、社会的な分断線に触れることなく、「もどかしさ」に閉じたまま時間が過ぎていったのだ。先に進むことは可能か、それともこのまま消えてしまうのか——その危機を乗り越える術は、あきらめずに「記録」をしっかり見出していくことと、それをコミュニケーションの媒介とすべき、環境(場、実践)の創出である。

2. 戦争資料としてのテレビ番組アーカイブの「地層」

テレビ番組もその重要な「記録」の一つのカテゴリーである。様々な一次資料の痕跡が刻まれた映像群は、膨大な情報のアーカイブを成している。加えて、テレビというメディアの存在自体があの戦争の終結と切り離して語ることができないという「メタ情報」も含んでいる。しかし、これを我々はまだ十分に活用できる環境にない。

2005年(戦後60年)が、「戦争番組の大量生産」の一つの起点であったと考えてみた。それから15年、記録と記憶の地層がどのように形成されてきたか、「8月」という特別な月を切り取って考察してみた。そこには「過ぎていく時間」への抗いだけでなく、「どのようにその出来事を伝えていくか／何を検証の対象とするか」に関わる本質的な攻防が、番組個々の殻を破って、浸み出していた。桜井均は『テレビは戦争をどう描いてきたか』(2005、岩波書店)で、その流れを「モノログからポリログへ」と評した。しかし2005年以降の「行きつ戻りつ」は、むしろその道程の容易ならざる様を表現している。

3. アジアへの眼差し／アジアからの眼差し(～2005年と2005年～2015年)

番組において「何が語られているか」を析出するのみならず、「何が語られていないか」を考えていける可能性が、アーカイブ研究にはある。桜井がポリフォニーの契機として「アジアが見えてきた」(同書、第4章)とした1970年代のドキュメント映像で提起されたことがらは、戦後60年以降の番組にどのように継承されたのか／されなかったのか。はたしてそれらは「戦争責任と戦後補償」(同書、第5部)の主題の中に、ストレートに回収されるべきものだったのだろうか。1990年代～2005年に至るコンテキストと挫折、そしてその後の停滞について概観する。

4. ケーススタディ：ドラマ『レッドクロス』(TBS)への／からの眼差し

語られてこなかったものは、アジア「から」この戦争を見た「他者の眼差し／他者のことば」である。既に75年が経過した今、それを一から拾い上げていくことは困難である。しかし、想像力によってその穴を埋めていくことはできるだろう。その可能性を本発表では「ドラマ」に見ていく。

2015年8月に放送されたTBS開局60周年特別企画『レッドクロス～女たちの赤紙』に描かれたもの(満州帰還、インパール、～朝鮮戦争まで)から、同年～2018年にかけて放送された幾つかの番組のリンクを辿り、アーカイブ的視聴と、そこに「他者の記憶」を重ねる契機を捜していく。

参照映像

- 『TBSテレビ60周年特別企画レッドクロス～女たちの赤紙』2015/8/1、2
TBS 【DVD】
- 『戦後70年 千の証言スペシャル 女たちの赤紙』2015/8/2 TBS
- 『NHKスペシャル「女たちの太平洋戦争～従軍看護婦 激戦地の記録～」』2015/8/13 NHKG 【公・オ】
- 『NHKスペシャル「樺太地上戦 終戦後7日間の悲劇」』2017/8/14
NHKG 【オ】
- 『NHKスペシャル「戦慄の記録 インパール」』2017/8/15 NHKG
- 『ETV特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」』2017/8/5 NHKE
- 『BS1スペシャル「父を捜して～日系オランダ人 終わらない戦争～」』2017/10/8 BS1 ほか

※公：公開ライブラリー オ：NHKオンデマンド で視聴可能

チェ・ウンヒ
崔 銀姫
(佛教大学)

「朝鮮戦争と『記憶』： 和解学の理論構築と実践についての小考察」

1. 朝鮮戦争と「集合的記憶」

朝鮮半島においてイデオロギーの分水嶺となった朝鮮戦争(1950年～1953年)と朝鮮戦争以後韓国のマスメディアの磁場のなかで支配的なイデオロギーとなった「反共」という言説的ヘゲモニーはいかに「世代」という集合的主体に繋がっていたのだろうか。また、朝鮮半島におけるこうした記憶の諸像を「和解」という未来へ繋げようとする仮説のロジックは何か。

昨年(2020年)日本マス・コミュニケーション学会秋季大会ワークショップでは、1990年代に韓国の文化放送(MBC)で特別企画放送された二つのテレビドキュメンタリー『76人の捕虜たち』と『40年ぶりの帰国』(1993年)や小説『廣場』、バラエティー番組『今、会いに行きます』(ChannelA, 2011年～)を主な対象としつつ、「反共」というイデオロギーと主体をめぐる屈折と葛藤の記憶を検討した(テーマ：1990年代のメディア言説における朝鮮戦争の記憶：「選択する国」と「離脱する身体」)。今回は、前回のワークショップのテーマをさらに発展させた形として、記憶と和解に関わる諸問題を中心に、理論的かつ実証的に検討する。つまり本報告では、1990年代冷戦終焉以降のグローバル化の浸透や、ネオリベラリズムの経済的・政治的影響と韓国社会の変化、日本と韓国におけるナショナリズムな世論の昂揚、メディアネットワーク化への急速な拡大、そして国境を超える人の移動と韓国への脱北者の急増といった社会的動向を視野に入れながら、戦後、朝鮮戦争は公共の空間のなかでいかに支配的言説を構築してきたのか、その際、朝鮮戦争とメディアに関わる社会的な葛藤への影響とその具体的な変化とは何か、そして、こうした戦後の公共の記憶から「国際的和解」でありながら「国民の和解」となる過去(歴史)からの脱構築はいかに説明できるのか、さらに「世代」を中心に和解学の創成に繋げる理論と実践的考察の意義は何か、といった問題について「集合的記憶」と歴史のダイナミズムに焦点を当てながら考える。

2. 韓国社会の「世代葛藤」と『韓国戦争』のメディア言説

韓国はいわゆる「葛藤社会」と呼ばれている。そういった葛藤には「理念葛藤」「地域葛藤」「階層葛藤」「世代葛藤」が主に挙げられる。今回は、そのなかで特に世代に注目した。その理由として主に次の2点が挙げられる。

① メディア史の観点から、韓国の過去70年の放送史のなかで一線を描いた重要な出来事として公営放送(KBS)の『韓国戦争』(1990年)は欠かせない史実であるが(番組は米国タイム・ワーナー社によるThe Greatest Movies Ever Made 100に選定された(1994年))、その20年後に再び『韓国戦争』(2010年)が制作・放送された。この二つの番組『韓国戦争』シリーズは考証的な価値があると認められるので、「実録ドキュメンタリー」としてのその「歴史」を検討するのは有意義である。

② 『韓国戦争』の制作総責任者が、一方(1990年番組)は朝鮮戦争の経験世代であったが、もう一方(2010年番組)は戦後生まれの非経験世代であった。こうしたメディア送り手の時代的背景はテキストのなかで言説的差異をもたらしていたが、こうした差異を解釈するためには各時代の歴史社会的背景と世代との関係性の検討が欠かせないと考える。